

〔研究ノート〕

## 経験語る二つの様式の断絶 —知識の社会的組織化をめぐるドロシー・スミスの着眼点—

上谷 香陽

〔Research Notes〕

### On the Disjuncture between Primary Narrative and Ideological Narrative : A Consideration of Dorothy Smith's Investigation into Social Organization of Knowledge

Kayo UETANI

#### Abstract

The purpose of this paper is to examine some basic concepts of Dorothy Smith's sociological investigation (sociology for women or Institutional Ethnography). Based on her discussion, this paper reconsiders the way of knowing the social from within the everyday world. Smith's sociology tries to produce alternative sociological knowledge that extends people's ordinary knowledge as practitioners of their everyday lives into realms of social relations that go beyond their everyday world. This paper considers Smith's article "No One Commits Suicide : Textual Analyses of Ideological Practices" (Smith 1990a:141-173) to understand her concept of social organization of knowledge. In this article she examines the disjuncture between primary narrative of experience and ideological narrative of experience. She takes up such disjuncture as a point of entry into investigation of the ideological circle in which what is primary in people's experience is subordinated to the ideologically organized factual account.

#### 1. はじめに

本稿の目的は、カナダの社会学者ドロシー・スミスの社会学(「女性のための社会学」あるいは「インスティテューショナル・エスノグラフィー(Institutional Ethnography)」)を理解するために、その基本的な概念を考察することである。本稿がスミスの社会学を取り上げるのは、「社会的なもの(the social)を知るということはどういうことだろう。」「日々の生活の中で具体的な他者とやりとりしながら自分が見たり聞いたり行なったり思ったりしていることは、どのようにして、個別具体的な日常生活の場を超えた社会的なものと接続しているのだろうか。」「そしてそれはどのようなやり方で知ることができるのだろうか。」といった、「社会的なもの(the social)」について考えるための基本的な問いを、スミスの議論をとおして再考したいと考えるからである。とりわけ着目するのは、スミスの社会学が、上記のような問いをめぐり、人々の日常生活における知識を出発点とし、それを拡張するような形で新たな社会学的な知識を生み出そうとしている点である。以下本稿では、ある特定の個人の個別具体的な経験がそれを超えた社会関係に接続する際に顕在化する、経験の二つの語り方—プライマリー・ナラティブとイデオロギー的ナラティブ—の断絶をめぐる、スミスの論考(Smith 1990a:141-173)について考察する<sup>(1)</sup>。

## 2. 出来事二つの記述の断絶

スミスは、“No One Commits Suicide : Textual Analyses of Ideological Practices (「誰も自殺をしない：イデオロギー実践のテキスト分析」)” (Smith 1990a:141-173) という論考の中で、「she committed suicide」と「she killed herself」という言い方の違いについて論じている。通常、これら二つの文は同じ意味を持つと考えられている。それらは意味に関して、お互い置き換え可能に見える。一方が他方よりも多く言われたり、少なく言われたりするということもないように見える。しかしながら、それら二つの間には断絶があるのだと、スミスは指摘する (Smith 1990a:141)。それら二つの言い方は、異なる「言語ゲーム」を行なう、異なる社会関係に埋め込まれているのである。自殺は長い間、社会学的仕事の焦点であった。しかしながら、従来の社会学は出来事めぐるこの二つの記述の仕方の違いについて関心を払ってこなかった。社会学のテキストにおいて、「自殺」のようなカテゴリーは、人々が話すであろう現象を意味するために使われる。そこにおいて、カテゴリーと現象はお互い一つであるかのように見える。この文脈では「she committed suicide」と「she killed herself」の選択は、単に形式的で慣習的であるように見える。どちらも同じ出来事—社会学的探究の過程に先立ち、それとは独立に存在すると想定される「出来事」—に言及していると考えられているのである。

これに対してスミスは、別の手続きを試みる。すなわち、社会(科)学の言説からそれらの用語を取り出して、元々の社会関係に埋め込み直そうとするのである。それら二つの言い方は、特定のワークと用法を有している。それは、必ずしも、記述的あるいは指示的な用法であるわけではないのだ。スミスの戦略は、社会(科)学的言説が普通は隠してしまう溝(gap)を開こうというものだ。「she committed suicide」は「テキスト」に媒介された、標準化され一般化された知識形式で知られていることに依拠した言い方であり、「she killed herself」は人々の日常生活の生きられた経験において知られていることに依拠した言い方である。両者には、溝があるだけでなく、前者が後者を包摂するという非対称的な関係がある。スミスの言う「イデオロギー」とは、人々が経験を回想しながら作り出した記述(account)を、専門家の言説の記述に取って代え、置き換え、抑圧する方法である (Smith 1990a:142)。この「イデオロギー的動き(ideological move)」は、支配する社会関係(ruling relations)の内部で、個人を従属させる動きでもあるのだ。

誰かの自殺の時、その死についてのあらゆる公式の記述と、その死に巻き込まれた関係する人々によってその死が経験されるやり方との間には、最も鋭い意味での断絶(disjuncture)があるとスミスは指摘する。ここで着目されるのは、社会意識における以下のような裂け目(break)である。すなわち、人々が自分の生きられたアクチュアリティの特定の時間と場所の内側から何が起きているのかを経験し、話し、理解するやり方と、支配する社会関係に接続し(その社会関係に不可欠な一部である)公式化された没入的な知ることの様式との裂け目である (Smith 1990a:142)。この断絶が、スミスの社会学の探究の出発点である。「経験」はその語りにおいてのみ、語りの一つの方法としてのみ現れてくる。したがって、この断絶をめぐるのは、同時に、「何が起こったのか」の語りの異なる様式としての、institutional な言説の支配について取り上げられることになる。スミスの社会学は、社会意識の裂け目を、支配する社会諸関係のイデオロギー実践と、トークの日常の形式—この形式は経験されたアクチュアリティを抱え込んでいる—の間の関係として、探究するのである。

ここでは、経験を表現することが社会学の仕事だと主張されているのではない。むしろスミスは、知識の社会的組織化の未解決な問題(problematic)として、以下のような関係を取り上げようとしているのである。すなわち、個人の連係(coordinates)のシステムを中心0地点で経験している個

人における、意識や知ることのもともとの根本的な場所と、「実際に起こったこと」の表象の抽象的なシステム—その中で「suicide(自殺)」のような表現が選ばれ主体が削除されていく—との関係である(Smith 1990a:143)。「suicide(自殺)」のような表現の中で、個人とその行為は、専門的知識人の言説の構成要素としてふさわしくされ外在化(externalize)されたカテゴリーの中に消えていく。「she killed herself」と「she committed suicide」の表現における見かけ上の指示対象の同義は、もし私たちがこれらの表現と省察的(reflexively)に仕事をすれば、消滅するだろうとスミスは指摘する。二つの表現は、それら双方が意図するアクチュアリティとの関係で、異なったやり方で位置づけられているとわかるからだ。「she killed herself」は日常の言説の言語だが、「she committed suicide」はイデオロギー的様式におけるものだ。イデオロギー的様式は、その中である行為が自殺になるところの支配する社会関係の内部に、物語を埋め込むのである。

### 3. 実際の実践活動としてのイデオロギー

スミスの社会学は、人々が、公的組織や組織的实践活動の官僚的、専門的、その他の諸形式に、見えないが深く依存していることを探究する。日常生活はそれら公的組織や組織的实践活動によって組織化され統制され、それらと日常生活の社会関係において現象は存在するようになるのである。組織的過程(institutional な過程)は、実際に起こっていること、経験、進行中のこと、出来事、アクチュアリティとしての事態の状態を、公的組織の法や目的によって定義し定義される客観化する記録システムへ置き換えるワークを行う。このワークの考察なしには、日常生活世界を(専門知識人の言説における)カテゴリーを超えて見出すことができないのである。

「she killed herself」が、必ずしも、特定の場所から特定の主体の知ることの内側から話す言語に私たちに委ねるわけではないが、「she commit suicide」がそうではないことは明らかだとスミスは指摘する。後者は、知識の文書の形式によって媒介された、支配の institutional な形式において生起し、その中に属している。「she commit suicide」は、政治や行政や経営の装置によって提供された事実的言明(statement)の形式だ。客観化され普遍化された行政システムと、常に局所的で常に個別の無尽蔵に多様なアクチュアリティの間に、ある関係が創出されるのである。

このことは、ある死を「自殺」として決定することにおける、検死官事務所のワークにも当てはまる(Smith 1990a:144)<sup>(2)</sup>。北米においてこの事務所は州の機関だ。それは弁別的な法的権限を持っている。この機関は、市民たちによる肉体的暴力の使用をコントロールし、人口動態統計や公衆衛生情報などを保持することに関連する記録づけをコントロールする、州のシステムにとって必要不可欠なものだ。一貫した行為出来事のタイプあるいは死のタイプとしての自殺は、これらの利害関係によって枠づけられる。死の詳細(particulars)は、ある社会関係の特徴である関連性の枠組みによって記述可能なものとして組織化され、選択される。一連の記述カテゴリーが、それについての報告(account)が作成されなければならない死に照らして網羅的であれという要請は、承認された所与の国家的実体の管轄の内部であらゆる死を確かにするための、州にとっての要請なのである。組織的な実務として「何が起こったか」を構成するために、一連のカテゴリー、カテゴリーを満たす方法の開発、記述カテゴリーを生きられたアクチュアリティと接続する方法の開発が、州や州の関心の専門的拡張の作動において、その一部として生じる。それらは、州の組織や他の支配する諸装置や諸関係にとって不可欠なのである。

したがって、「自殺」はある一つの死の特徴という単純なものではないし、そうではありえない。

それはむしろ、州の機関のワークにおいて保証できるものにされ、記録された、ある死の報告である。「自殺」は、州の利害関心や、それらの利害関心をずらりと並んだ法的に保証された諸カテゴリーとして実現する確立された参照枠組みと、州の機関の実務的活動によってそのように構成された出来事のあいだの、一つの関係を表現している。すなわち、「自殺」という現象は、病院や医療記録のワークの組織化、死亡証明書の産出、検死官の法廷での仕事、警察の仕事、立法行政的過程といった社会関係の複合体において、生成され、維持され、関連づけられ、統制されているのである (Smith 1990a:145)。

ここには分業がある。一方では、誰かの死を「自殺」として報告する専門的行政的ワークの組織化がある。他方で、言説的諸関係—複数の局所的場において構成された情報を、熟考し、体系化し、そこから一般化する—において組織化された、知識人の二次的ワークがある。専門的知識人の理論化—知識—は、それに先立つ、知識の組織的形式を作り出す行政的ワークに依拠している。そうしたワークは、一般的に、組織的目的のためにあり、おそらく組織的関連性のスキーマの内部にあり、それらのスキーマの処理技術に従っているのである。

このことは、この社会におけるもっと一般的レベルのイデオロギー的組織化を示唆するとスミスは言う (Smith 1990a:145)。それは、人々の日常生活に直接作動する *institutional* な装置と、一般化し体系化し理論化する言説的ワークや組織化の間の、この特徴的な分業に組み入れられている。この分業は、第一に、人々の毎日/毎夜の世界の経験の個別的なものを「データ」(「所与」を意味する)へと方法的に変換する。第二に、それらの練り上げられたデータを社会(科)学の理論化し、統合する操作に入れるのである。カテゴリーや概念は、直接アクチュアリティを意図するかのようにみなされうる。しかし、生きられたアクチュアリティと社会(科)学者が読むテキストの表面の間には、*institutional* な支配する装置の複合体のワークが介在しているのだ。社会(科)学は、理論的スキーマと、スキーマが意図するアクチュアリティとの一致を探究する方法を開発してきた。その方法を使いながら、理論の自立性を完全に保存すると同時に、確定的な形式のデータを組織化する理論の能力を試すのである (Smith 1990a:146)。社会(科)学的言説の理論的ワークは、官僚的、経営的、専門的組織がその実務的目的のために使用する概念的スキーマを開発し、物象化し、テストし、改めるのである。

スミスの社会学の仕事は、社会科学者が入っていく/入っている社会関係やそのやり方を解明することだ。これら相互関係した実践活動において、多様な *institutional* な諸文脈で働く専門的知識人のメンバーたちの間の「精神的労働」の分業を見ることが出来る (Smith 1990a:147)。これらの社会関係の異なる部分のつながりは明らかではない。しかしそれらは、生きられたアクチュアリティと、文書の形式(その中でアクチュアリティはさらなる *institutional* なワークのために流通する)で知られることになる出来事の、実際のつながりを創り出す。専門的言説と *institutional* な構造のあいだの交差点で何が起っていていようと、日常生活のアクチュアリティに対する官僚的装置の変化する諸関係を、継続的に統合し、循環させ、フィードバックし、連係するのはこの知識のイデオロギー的組織化の過程である。「she commit suicide」という言い方は、私たちにそのようなイデオロギー過程の入場許可を与えるが、「she killed herself」は与えないのだとスミスは言う。着目されるのは、「she killed herself」としての日常生活の言葉と、そうした言語を変化させる力のある、「自殺」として)名詞化する (*nominalizing*)、イデオロギーの言葉「she commit suicide」との関係である。社会学者を含め、専門化された職業的な言説の実践者に利用可能になるのは、後者の言葉なのである。



#### 4. 社会諸関係の構成要素としての「テキスト」の探究

スミスはこの論考で、経験されたものとイデオロギー的なものの裂け目を探究するために、産出方法として直接、経験に依拠しているナラティブである「プライマリー(primary: 一次的な)」ナラティブの特徴的な構造化と、イデオロギー的に秩序づけられたナラティブの構築のための手続きを対比する。「テキスト」の分析によって、イデオロギー的記述を産出するためにプライマリー・ナラティブに働きかける社会学者としての自身の方法が探査可能になると、スミスは言う(Smith 1990a:148)。ここで「テキスト」の分析とは、印刷されて存在するものに排他的に焦点を合わせるという意味でのテキスト分析ではない。むしろここで「テキスト」とは、社会諸関係の構成要素として理解されている。したがって、テキストの相互関係をどのように操作するかについての自分自身の知識を探査することによって、自身の実践活動と、社会諸関係—それらの実践活動が埋め込まれていると同時にそれらの実践活動が組織化するところの—の部分(segment)の両方を明らかにする、社会学的探究が可能になる。スミスの探究は、「生きられたアクチュアリティ」と事実の専門的、官僚的産出の間の接続(juncture)の過程に対する、社会学者としての自らの関係を取り上げる。その過程では、社会学者としての自身のワークによって生成される言説的スキーマが、支配するテキスト的諸現実の構成過程に入り込んでいると考えられるのである。

この探究のために利用する素材(materials)は、この過程を様々な地点でつなぐテキストの集積から成っている。例えばスミスは、精神医療において「患者(case)」を作り出すために、いかにして精神医学的スキーマがプライマリー・ナラティブのテキストにおいて作動するかを考察する。考察は、テキストを、それが埋め込まれている諸関係の実際の構造に持ち込む。スミスは、専門的知識人として自分たちがスキーマをどのように作動させるかについての自身の実践活動と暗黙の知識を、社会諸関係に帰属されるものとして解剖するのである。ここでは、社会科(学)者を、彼女が探究することがらから切り離さない。テキストに結びつけられた社会関係は、内側から、経験されるように探査されるのである。この分析が依拠する過程や実践活動は、私的なものではない。それらについては、他者も—とりわけスミスの論考を読みそうな人は—すでにやり方を知っているのだとスミスは指摘する(Smith 1990a:149)。

ここでスミスは「社会関係」<sup>(3)</sup>という概念について、以下のように説明する(Smith 1990a:150)。社会過程に対するスミスの社会学にとって不可欠なのは、諸個人のアクチュアルな実践活動と、それらがある社会的な一連の行為を形成する中でどのように接続しているかを同定することだ。異なる諸個人と、異なる諸個人の一連の行為が複数の関係の中に入っていく。そのことを通して、それらはお互いに組織化されていくのである。ここで分業とは、社会的課題を役割—それは社会的に組織化される実体の構成要素だ—として個人に割り当てる、というようには理解されない。むしろ、分業とは、その中で社会現象の一般性と相互主観性が達成されるところの、実際の過程なのである。ここで使われる社会関係とは、社会現象の特別な種類を同定するものではない。むしろそれは分析的装置であり、考察のために拡大され焦点を合わせられた現象において、それらの現象が構成要素であるところの社会的な一連の過程を可視化するのである。

例えば、エスノメソドログイストは、法廷のトークの特定の部分、つまり「割り込み」を発話出来事の一般的な種類の例として言及する。この時、法廷の直接的な場面は、その出来事の時空間的境界線として受け取られている。これとは対照的に、スミスが開発してきた探究の方法は、割り込みを、法廷においては完全に存在するわけではなく観察できるわけでもない、ある社会関係の特徴と

して扱うのである。法廷のトークは、訴訟手続きの公式に保証された議事進行の記録の産出に向けられている。この記録は、一定の法的地位と法的使用を有している。この記録に責任を持つ人々は、判事と法廷の記録係だ。この記録はしたがって、法律家が、もっと大きな舞台上で、上訴を行うような目的のために利用可能になる。法廷の割り込みは、〈記録のために〉何が言われ、誰が何を言ったかを明確にする、専門化されたやり方において処理されている。法廷の割り込みは、ある社会関係の文脈で弁別的な特徴を持っているのである (Smith 1990a:150-151)。

したがって、分析装置としての「社会関係」は、特定の局所的場面の活動やテキストを、人々の直接的時間や場所や能力を超えた、社会的な一連の行為に接続されるものとして探査する。スミスの社会学における「社会関係」という概念は、「観察」の瞬間—その中で、現象は、私たちにとって、私たちのここといまにおいて生じる—から、その現象がいかにして社会関係における前後する瞬間によって組織化され／へ接続されるかを暴く分析へと進めるようにするのである。

## 5. 生きているアクチュアリティを、支配する社会関係に変換する

「生きられたアクチュアリティ (lived actuality) (a)」から、「変換する (encoding) 秩序づけるワーク (b)」を経て、特定の解釈的方法やスキーマを意図する一つの「事実報告 (factual account) (c)」へ進む一連の過程がある。ある意味で、生きられたアクチュアリティは決して生起しない。というのも、それは常に生きられているからだ。起こっていることあるいは起こったことが何かということは、記録が作られ、物語が語られ、写真が撮られる時点でのみ生じるのである。スミスの議論においては、記述用語と、対象あるいは出来事の対応という存在論的問題は迂回される。というのも、「生きられたアクチュアリティ」は、省察の瞬間—経験は、そこで、ある記述や、記述を目的とした変換によって意図される—でのみ生じるからだ。「変換 (b)」から「事実報告 (c)」への過程は、「生きられたアクチュアリティ (a)」をその記述において指示されるものとして構成するのである (Smith 1990a:152)。

「変換 (b)」の過程とは、「アクチュアリティ (a)」からある「事実報告 (c)」へと進む過程である。この過程は、用語や、適切な連鎖を表現する文法的、論理的なつながりの選択を含む。この「変換 (b)」の過程には、「解釈スキーマの使用 (d)」が含まれている。「アクチュアリティ (a)」を「事実報告 (c)」に変換するための、指示や適切さの基準の選択や秩序づけにおいて、何らかの解釈スキーマが使用されているのである。専門的知識人は、このような過程を経て産出された「事実報告 (c)」に依拠して分析を行い、理論や概念スキーマをさらに洗練させるワークを行う。一定の解釈スキーマに依拠して産出された「事実報告」をもとに、新たな解釈スキーマが生み出され、そうした新しい解釈スキーマがさらなる「事実報告」の作成に使用される。この循環をスミスは、「イデオロギー的循環 (ideological circles)」と呼ぶ (Smith 1990a:93)。

「アクチュアリティ」を「事実報告」に転換する過程には、ある社会関係として秩序づけられた諸実践の複雑な連鎖へ拡張する分業が存在する (Smith 1990a:152)。プライマリー・ナラティブ様式で記述されるだろうことがらにおいては、経験する人 (a) と、話へ変換する人と話す人 (b と c) は一人の同じ人であり、聞き手や読み手が (d) の解釈的瞬間に入っていく。対照的に、今日の北米の文脈で誰かが自死する (kills herself) 時、(a) と (b) に関わる人々に関しては過程においていくつかの重なりがあるかもしれないが、変換や事実報告の構築 (b と d) は大部分、警官や検死官や他の人々を含む「権威者たち」のワークだと、スミスは指摘する。その解釈スキーマが意図される「読み手」はニュー

ス・レポーターかもしれないし、社会学者や、専門的研究仲間(同僚)かもしれないし、自死した人の家族や友人かもしれない。同様に、州の公的な記録係かもしれない。かれら全てが「解釈スキーマの使用(d)」の地点にいる。この地点は、社会学者もまた、自らの仕事を始めるときに位置づけられている場所である。

スミスの社会学にとってテキストを分析する目的は、テキストの中に、私たちがその実践者であるところの社会諸関係を発見することにある。分析を通してスミスは、社会学者としての自らの暗黙の実践活動—それらは、あるテキストの特徴の中に発見される—を解明しようとする。「主観的」過程は、テキストの解明において客観化される。テキストの分析は、いかにしてやるかについて私たちが知っていることを解明するのだと、スミスは言う(Smith 1990a:153)。このことは、テキストが、私たちが指揮する解釈スキーマを意図していることを前提とする。私たちが操作の仕方を知らなかったり、学べなかったりするスキーマを意図することは、そのテキストが私たちにとって効果的に死んでいることを意味する。解釈スキーマがテキストを生産する過程に入っていく時には、テキストは解釈スキーマを(必ずしも特定の解釈である必要はない)意図している、と言われなければならない。書く過程、訂正する過程において、あるトピックをどのように言うか再考する過程において、あるトピックを、まず考えられるように、次に適切に、明確に、上手く表現されうるように考え抜く過程において、テキストは発展される。テキストは、その創出の中に規範的に入り込んできた解釈スキーマに依存しそれを意図しているのである。

意味は、読み手の、テキストとの沈黙の取引において達成されるのだ、とスミスは言う。テキストに意味としての生命をもたらすのは読み手だ。テキストと読み手の間の関係は、特別な種類の内的発話、読み手の内部の「会話」のような形をとる。その意味で、テキストと読み手の関係は主観的だ。しかしながらスミスは、「にも関わらず、それはまた明らかに社会的なのだ」と主張する(Smith 1990a:153)。読み手は、テキストの意味を見つけることにおいて解釈スキーマを使う。彼女は、解釈スキーマを、物事を決定する(determinate)社会諸関係—彼女の解釈ワークがなされる文脈における社会関係の言説を含む—に参加しながら、社会のメンバーとして学んできたのである。スミスは、読者がテキストと読み手両方の役割を果たす「内部の会話」を、社会関係の一つの物質的な瞬間として捉える。「内部の会話」は、社会関係に埋め込まれており社会関係の組織化に不可欠な、ある解釈過程を示唆しているのである。

あるテキストの効果的意味をめぐる主観性の問題が解けないように見えるのは、特定の読み手と特定のテキストの接続における瞬間を分離するからだ。スミスは指摘する(Smith 1990a:153)。この瞬間を分離すると、解釈スキーマは、読み手がテキストに持ち込む技能、属性、情報源、生活誌的な特徴に見える。したがって、特定の読み手の性質に見える。いかなる特定の読者においても生起するものとしてのテキストの効果的な意味は、もちろん、特定の読み手の解釈資源やコミットメントに依存している。しかしテキストと読み手の関係をそれが接続される実際の社会諸関係の中に埋め込むことによって、スキーマは社会諸関係の特徴として位置づけ直すことが可能になるとスミスは言う。読み手とテキストとの結びつきは、テキストが接続される社会諸関係に照らして考察されるのである。

このことは、社会学者が通常は注目していないことからである(Smith 1990a:154)。なぜならば、社会学者としての自身のワークが埋め込まれている社会関係において、彼女たちはテキストを対象とみなして対峙しているからである。社会学的探究のワークの対象としてのテキストの特徴が、彼女たちの意識における主題になる。テキストは、ある社会関係として連係される実践活動の連鎖に

おける一つの瞬間としての、アクティブなやりとりのある (transactions) 存在においては現れてこない。探究という企図へ向けられた社会学者たちの眼差しは、自分に向けてはいない。いかにしてこの瞬間もテキストが、自身のワークの社会関係の文脈で弁別的な特徴を引き受けているのかを認識しないのである。この瞬間と言説との関係は、社会学的探究の実践活動を取捨選択し従属させる、コントロールする枠組みとして作動しているのである。

したがってスミスの社会学においては、社会関係—テキストはもともとそれを意図して書かれたもの—によって提供される、コントロールする枠組みと解釈スキーマを見出すことに関心が払われる。テキストは、しばしば、アクチュアリティ—実際はそれはテキストの中に変換されたものであるにも関わらず—を「指示」している記述であるかのように読まれる。そのテキストが入っていくところの社会諸関係の、あるいは、テキストが使用される文脈でそれがどのように読まれるかの、関連性とスキーマを考察する必要がある。そのことが、テキストが意図する解釈の社会諸関係を解明することなのである。ここでの主要な焦点は、事実報告の産出と解釈に入っていく、イデオロギー的実践活動にある。イデオロギー的に形作られた事実報告の分析は、支配する装置の異なる部分の間の分業の、拡張された諸関係におけるある側面を可視化すると考えられるのである (Smith 1990a:155)。

## 6. プライマリー・ナラティブとイデオロギー的ナラティブ

経験されたことは、話すことや、聞くことや、読むことの成員の方法において社会的なもの (the social) になる。事実報告を構築したり解釈したりすることにおけるイデオロギー的諸実践は、その一つの方法だ。イデオロギー的諸実践とは、以下のような弁別的な様式である (Smith 1990a:156)。そのような実践活動において、テキスト的言説の普遍化された用語や官僚的な組織化などが、局所的な記述に挿入される。そのことを通して、局所的記述は、支配する諸関係の抽象的な管轄 (jurisdiction) の内部の「例」として再構築されていくのである。スミスは、イデオロギー的方法を、マンハイムによって言及され、ガーフィンケルによって発展された、解釈のドキュメンタリー・メソッドの特別なケースとみなしている<sup>(4)</sup>。

厳密に言えば、ガーフィンケルによるパターンと部分の相互関係の記述は、スミスの言う「イデオロギー的循環」と完全に一致するものではない。彼の概念は、もっと広いのだ。彼が使ういくつかの例には、出来事を、テキスト的言説のスキーマの証拠 (document) として扱うことは含まれていない。ガーフィンケルの言う解釈のドキュメンタリー・メソッドは、例えば、会話のプロセス—ある人が「何について話している」のかを(その人が自分の意味することを厳密に言うわけではないとする時に)認識するという日常の必要性—を含むものである。しかし彼はまた、極めて異なる種類の例も出してきている。それによれば、ドキュメンタリー・メソッドは、社会学的に分析された出来事の生起を決定することにおいても認識可能である。たとえば、ゴフマンの印象操作の戦略、エリクソンのアイデンティティ・クライシス、リースマンの他者指向型、パーソンズの価値システム、あるいは合衆国国勢調査の職業カテゴリーなどである。この種のドキュメンタリー・メソッドは、スミスが「イデオロギー的循環」と呼んだものと重なるのである (Smith 1990a:156)。

スミスによれば、この循環は、二つの側面の産物として生起する。(1) 出来事の生起を、テキスト的言説において生じる「根底にある」スキーマ—例えば、ゴフマンの印象操作の戦略や、パーソンズの価値システムなど—の証拠として分析する解釈方法、という側面。(2) そして、事実や観察を



文書(documentation)として選択し組み立て秩序づける手続きとして、「ゴフマンの戦略」や「パーソナルの価値システム」によって同定されたそのスキーマを使用する、という側面である。この過程をイデオロギー的循環として解明することは、それを社会諸関係の文脈の中に見出すことだ。その中でテキスト的言説は、特定の人や場所や出来事から成る日常生活世界を、官僚的、専門的組織化(テキスト的言説と行為の組織化)の抽象化され一般化された言語へ書き直すワークを構造化する。多様で個別的なものは、実際には、同じ概念の「例」として扱われうるようになるのである(Smith 1990a:157)。

ここで「イデオロギー」という概念を使うことにおいて、スミスは、読みの記述を生成するための「イデオロギー的な手続き」と「科学的な手続き」を、あるいは、「偏った手続き」と「偏らない(客観的な)手続き」を対比しようとしているわけではない。ここでは、「実際に起こったこと」の一つの客観的記述が存在することは想定されていない。生きられたアクチュアリティは、省察—それを通して「実際に起こったこと」が生じるのである—に関わる記憶の資源であり続けるものとして捉えられている。スミスの議論において、「実際に起こったこと」を変換し構成するイデオロギー実践活動と対比されるのは、経験における生きられたアクチュアリティの直接的な表現の手続きである。スミスは、後者を、表現の「プライマリー・ナラティブ」様式と呼ぶ(Smith 1990a:157)。両者の違いは、正確性や完全性や真実ということではない。違いは、語ること、解釈することのやり方にあるのである。

スミスによれば、事実報告を構成することや読むことにおけるイデオロギー実践活動は以下のような予備的なやり方で特徴づけられうる。用語を選び、記述の文法的論理的因果的つながりを生成する解釈スキーマは一生きられたアクチュアリティの表現として生起するつながりによって拘束されるというよりは—テキスト的言説(テキストに媒介された「会話」)の中で生まれる。したがって(多様なタイプの)用語や接続詞の選択は、イデオロギー的「文法」によって指示されそれに適合させられる。この「文法」は、テキスト的言説から引き出される一連の規則と手続きだ。それらの規則や手続きはテキストを読む時に使用される解釈スキーマであり、そこから引き出されたものでもある。それらはテキスト的言説のスキーマであり、もしテキストが読者に理解可能であるならば、そのようなものとして学習されてこなければならない。テキストを生成したり解釈したりすることにおけるそのような実践活動は、プライマリー・ナラティブ様式の解釈的生成的実践活動と対比されるものである。

話すこと聞くことの弁別的な方法が、経験の語り—それは生きられたアクチュアリティを意図し、それに基づき、それに合致する—を特徴づける。ここでスミスが強調するのは、プライマリー・ナラティブは単なる一つの様式であり、プライマリー・ナラティブにおいて作られる記述の方がより正確だと主張しているのではないということだ(Smith 1990a:157)。しかしながら、プライマリー・ナラティブは、イデオロギー的ナラティブとは異なるやり方で、ナラティブと生きられたアクチュアリティの関係を設置する。ここでスミスは、LabovとWaletzkyによるオーラル・ナラティブの研究に言及する<sup>(5)</sup>。LabovとWaletzkyは、経験に基づいたナラティブの構造的枠組みの分析(そこにおいては、時間的な連鎖が中心である)を開発することに関心を持った(Smith 1990a:158)。

例えば、もしある人が暴漢から逃げてきて、通りの反対側にたどり着いた後でつまづく時に何が起こるか、そこにたどり着く前につまづく時に何が起こるかが違っていることを、私たちは、普通の、問題のないやり方で知っている。「そして彼らは私に追いついて来た／そして私は通りを横

切り／そして私はつまづいたんだ」と、「そして彼らは私に追いついて来た／そして私はつまづき／そして私は通りを横切ったんだ」は異なる連鎖である。私たちが両者の違いを見つける時、代案をチェックできる資源として日常生活世界における自身の経験を導入する、指示操作を行っているのだという。そのような解釈方法を使った読み手は、二番目の連鎖における言われないピースを「訂正」したり埋め合わせたりすることができる。「私はつまづいた」と「私は通りを横切った」の間には、私たちが読んでいる時にはとてもスムーズに挿入している何かが欠けているのである。この読み手の移行的ワークを特定のナラティブ節として表現しようとする時、私たちは自身の経験を資源として扱っているのである。

スミスは最初、この欠けたピースの表現を以下のようなナラティブ節として与えたという (Smith 1990a:159)。すなわち、「そして私は彼らが私を捕まえる前に起き上がった」というものである。後にわかったのは、スミスは「私はつまづいた」を、その主体が転んだことを意味するものとして読んでいたということだ。しかしおそらく、彼は転んではいなかった。おそらく彼は自力で立て直したのだ。解釈的決定が何であれ、代案は、テキストの中には存在せずテキストからは訂正できないことを、彼女の経験の背景知識から埋め合わせる読み手に依存している。プライマリー・ナラティブは、読者に、解釈資源として彼女の経験に依拠する特権を与える。解釈は原則として、そのナラティブが「再現している」元々の経験であるところの、オリジナルの経験に照らしてチェックされるのである。

プライマリー・ナラティブ様式で経験を語る中で、語り手は、ナラティブを発展させながら自分の経験を参照していく。経験されたアクチュアリティが、プライマリー・ナラティブを規制していくのである。分類や秩序づけは、ナラティブが話されるにしたがって進んでいく。適切な連鎖が、経験の記憶から引き出される。その記憶は、ナラティブの様式においてあらかじめ秩序づけられてはいない。手続きは、ナラティブ節を確立し、不完全に思い出されたある生きられたアクチュアリティに対して訂正することを含む。語り手は、出来事を指示し、その中で出来事が起こったはずの秩序を確立することによって、ナラティブの連鎖を作動させるのである。(Smith 1990a159-160)。

他方、イデオロギー的手続きは非常に異なっている。実際に起こったことは、公式の記録として生産されなければならない。質問をし、観察し、「詳細」として記述するだろうことを、アクチュアリティからより抜く方法を使うワークを、誰かが行っている。結果として生じる事実報告、あるいは変換の時点でのもっと前の段階の記述は、「この詳細」の選択、組み立て、秩序づけを表象する。スミスは「詳細(particulars)」という用語を、法廷における使用法から借りている。「詳細」とは、何が起きたのかの記述だ。それは例えば、どの特定の罪を告発するかに基づいて警察によって準備される。それらは中立的な記述ではない。それらはある特定の法的に定義された罪を意図した形式で、起こったことを表象する。紹介される他の情報は、決定的な関連性と境界線を規定するその告発と一致しなければならない。ここでは、何が本当に起こったのかという問いは、問題ではない。真か偽か、有罪か無罪かという問いは、この告発に関係する詳細に向けられている。詳細は、意図された告発に沿う形で組織化される。このやり方において、「実際に何が起こったか」は、それが公式の告発としての法的過程に入れられようように仕立て上げられるのである。

プライマリー・ナラティブを構築する方法とそれを読む方法は、共に、イデオロギー的なものとは異なる。話すことにおいて、プライマリー・ナラティブは、単独の語り手のものでも、複数の語り手のものでも実際の経験に依拠している。ナラティブ連鎖は実際の一連の出来事に依存している。その連鎖の秩序づけは、話すことにおいて構成されている。解釈的ワークとしての参照手続き

もまた弁別的である。読み手の解釈的ワークは、話し手の経験と結びついた彼女自身の経験に依拠している。この関係は、「私はまさに彼女がどのように感じたかを知っている」「かつて私に起こったまさにそのようなこと」のような言い方の中で表現されていく。このナラティブに伴う困難は、読み手の経験が、ナラティブ節を完成させたり、経験とナラティブ節の間をスムーズに移行させることができない時に特徴的に見出される。しかしそのような困難は、話し手に、彼女の経験について質問することによって解消される。話し手が、唯一の権威者なのである(Smith: 1990s:162)。

対照的にナラティブのイデオロギー的形式は、以下のようなやり方で進む。それは、専門的あるいは他のテクニカルな言説の適切な解釈スキーマを、読み手や聞き手が把握しているかに依存する。実際、事実報告は、解釈的つながりが専門的読み手によって供給され続けるような詳細のみで構成され、産出されるだろう。テクニカルな言説の解釈手続きについての知識は、テクニカルの中につながり—それが「テクニカルな言説の言っていること」になる—を読み取ることを可能にする。もし読み手が、イデオロギー的記述によって意図されたスキーマを知らなければ、その記述において組み立てられた詳細は意味をなさないだろう。明示的ではないつながりにおいて読むためには、読み手は、その言説のスキーマを知っていなければならないのである(Smith 1990a:163)。

ナラティブの二つの様式は、ここでは互いに独立したものとして呈示された。しかし、実践活動におけるイデオロギー的手続きは、もともとはプライマリー・ナラティブの形式において与えられた素材においても、しばしば作動している(Smith 1990a:161)。プライマリー・ナラティブの記述は、イデオロギー的変換の生の素材になる。人々は警察、検死官、精神科医などに、起こったことを話す。そうすることによって、彼らは自分の経験を引き出したり、それを参照したり、何が起こったかについての記述を訂正したりする。経験のある警察の取り調べ官は、反対尋問の技術において、プライマリー・ナラティブのまさにこの特徴に依拠する。プライマリーナラティブは、イデオロギー的ヴァージョンの生の素材を形成するのである。

## 7. おわりに

スミスはこの論考を、「she killed herself」と「she commit suicide」は同義か、という問いで始めた。その問いは、経験のプライマリー・ナラティブと、事実報告を書くこと読むことのイデオロギー実践の間の対比と矛盾について考察するための入り口なのである。スミスが提起するのは、経験を語るこれら異なる実践活動が、いかにして読み手(聞き手)を異なる社会関係へ参入させるか(あるいはまた、読み手(聞き手)によって、これら異なる実践活動が、いかにして異なる社会関係へ参入させられるか)という論点である。複製可能な物質としてのテクニカルのみかけは、テクニカルがそのような社会関係において読まれ書かれている状況を隠すのだとスミスは言う(Smith 1990a:172)。それゆえに、いかにして人々の読む実践活動が、そのような諸関係における自らの参加を組織化するのかも隠蔽されるのである。上の二つの言い方は、まるで、人々に対して同じ距離で立っているかのように見える。一つの言い方から、別の言い方に、それが埋め込まれている社会関係を変えることなく置き換えたに過ぎないように見えるのである。

スミスの言う「イデオロギー的循環」は、生きられたアクチュアリティ、そのアクチュアリティを公式の組織の記録や専門的言説へ書き入れる過程、知識人のワークと記録を書く人のワークを結びつけるフィードバックの過程、の関係に着目する。イデオロギー的循環の実践活動の組織化において、生きられたアクチュアリティと主体の経験のプライマリー・ナラティブは、イデオロギー的ナ

ラティブに置き換えられる。実際の出来事、すなわち、特定の場所において見出され実際の個人によって遂行された出来事が、抽象的で概念的な支配の様式や組織の内部で知られる、一般化された事実報告の形式に転換されるのである。institutional な過程において、二つのナラティブの関係は対等ではない。スミスの社会学は、この過程に関わる諸個人の実践活動を、支配する社会関係の組織化における一連の分業として捉え直す。そこにおいて、テキストに媒介された言説が多様な局所的な場を連係し、局所的なアクチュアリティを抽象化された管理に従属させるのである。

スミスは、「she killed herself」と「she commit suicide」の断絶を明らかにし、そのような断絶を生み出すメカニズムを、「イデオロギー的循環」の局所的ワークに実際に関わっている人々の立ち位置から解明する方法を模索する。ここでは、個人の経験が一般的な社会関係に接続する時何が起きているのかについて、テキストにおける「客観化された知識」からではなく、人々が日々生活しながら知っていることを出発点にして解明していく社会学的探究が模索されているのである。

## 注

- (1) スミスの社会学の着眼点については(上谷 2010a,b,2017a,b,2018a,b, 2019)を参照。以下、上谷(2019: 2-3)から、スミスの社会学を概略した部分を抜粋しておく。

「ドロシー・スミスの社会学は、個人の経験とそれを超えた一般的な社会関係はいかにして関わりあうのかを、実際に日常生活世界を生きる人々の経験の場所から問い直す社会学的探究である。人々が生きている毎日毎夜の局所的アクチュアリティがいかにして、その外に拡張し、その内部では発見できない社会関係によって組織化され決定されるのかを解明しようとするものである。個人の経験と一般的な社会関係に関わり合う契機としてスミスが注目するのは、人々が何らかの institutions と接触する時である。ここで institutions とは、多様な行政・経営・専門組織において生起する、今日の(先進資本主義)社会を組織化し、調整し、規制し、誘導し、統制する諸関係の複合体のことである。第一義的には、北米社会において、人々の日常生活に深く関与している、教育や医療や行政や経営や法や学問などに関わる諸組織や諸機関や諸施設などを指す。人々の個別具体的な毎日毎夜の生活で起こったことは、何らかの institutional な場面、文脈、過程、ワークと関わる過程で、一般的で抽象的な社会関係に接続されていくのである。これら institutions は、相互依存的に関連する複合体を成しており、単に実体的な組織としてのみならず、「テキスト」形式の「客観化された知識(objectified knowledge)」を媒介に複数の人々の行為が連鎖し配置される諸関係の交差点や連係として捉えられている。

人々が institutions と接触する際に必ず行われるのが、日常生活における個別具体的な経験を、「テキスト」—印刷されたものであれ、電子的なものであれ、複製可能な物質として組織間を流通する公的な文書—にまとめ直す作業である。作成された「テキスト」は、異なる場所で、異なる時間に、異なる人々が読む(見る、聞く)ために繰り返し現れるという特徴を持つ。「テキスト」がそれを使用する一つの場所から別の場所に移動しても認識可能に同一であるということは、行政・経営・専門組織がその弁別的な機能を果たすために不可欠である。諸組織や諸機関や諸施設において異なる時間、異なる空間でなされる人々の多様なワークは「テキスト」に媒介されて相互関連的に連係される。そのことを通して、人々の個別具体的な毎日毎夜の生活を外側から規定する何らかの決定が下されていくのである。個人の経験が一般的な社会関係に接続する時、何が起きているのか。スミスの社会学はこの問題を、



人々の日常生活の生きられた経験において知られていることと「テキスト」に媒介された標準化され一般化された知識形式で知られていることの断絶に着目し、この断絶のメカニズムを実際にそれを生み出す局所的ワークに関わる人々の立ち位置から記述(ethnography)するというやり方で探究しようとする。この社会学的探究を彼女は、*Institutional Ethnography* と呼ぶ。」

- (2) ここでスミスは、Atkinson, J.Maxwell(1978) *Discovering Suicide: Studies in the Social Organization of Sudden Death*. London : Macmillan. の議論に依拠している。
- (3) スミスはこの概念をマルクスに依拠して使っているが、「もっとも彼は、この概念を私と全く同じようには使用していないのだが(Smith 1990a:150)」とも述べている。
- (4) ガーフィンケルはこのドキュメンタリー・メソッドという方法について、以下のように述べている。「この方法は、ある実際のあらわれを、前提とされる根底のパターンの証拠として、それを指すものとして、その代表として、扱うことから成っている。根底のパターンが、その個別のドキュメンタリー証拠から出てくるだけでなく、個々のドキュメンタリー証拠も、逆に、根底のパターンについて「知られていること」に基づいて解釈される。それぞれがお互いを洗練するために使われているのである(Garfinkel 1967:78)。」
- (5) Labov, W., and J. Waletzky (1967) *Narrative Analysis : Oral Versions of Personal Experience*. In *Essays on Verbal and Visual Arts*, Proceedings of the 1966 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society, ed. J. Helm. Seattle : American Ethnological Society/University of Washington Press. を参照。彼らはナラティブを以下のように定義する。「ナラティブとは経験を再現(recapitulating)するための一つの言語的技術として考察されるだろう。とりわけ経験の時間的な連鎖に一致するナラティブ単位を構築する技術だ(Labov&Waletzky 1967:3 : 引用は(Smith 1990a:158))。」「私たちはナラティブを非公式に次のようなものとして定義してきた。すなわち、節の言語的(verbal)連鎖を実際に生じた出来事との連鎖と一致させることによって、過去の経験を再現する一つの方法、である(Labov&Waletzky 1967:20 : 引用は(Smith 1990a:158))。」「過去の経験を再現することにナラティブを制限することは、一般的な使用のための定義としては狭すぎるが、彼らの定義は自分の言うプライマリー・ナラティブの定義と一致するのだとスミスは指摘する。

## 参考文献

- Smith, D. E. (1987) *The Everyday World as Problematic : A Feminist Sociology*. University of Toronto Press.
- — —(1990a) *The Conceptual Practices of Power : A Feminist Sociology of Knowledge*. Northeastern University Press.
- — —(1990b) *Text, Facts, and Femininity : Exploring the Relations of Ruling*. Routledge.
- — —(1999) *Writing the Social : Critique, Theory and Investigations*. University of Toronto Press.
- — —(2005) *Institutional Ethnography : A Sociology for People*. Altamira Press .
- 上谷香陽(2010a)「ドロシー・スミスにおける社会学的記述の問題—— institutional ethnography という視点」『ソシオロジスト』12(1)pp.73-96. 武蔵社会学会。
- — —(2010b)「対話としての『経験』——ドロシー・スミスの視点」『武蔵大学総合研究所紀要』no.19、pp.117-133. 武蔵大学総合研究所。
- — —(2017a)「日常生活世界から社会を知る方法——ドロシー・スミス『女性の立ち位置からの社会学』の着眼点——」『文教大学国際学部紀要』27(2)、pp.1-16. 文教学部国際学部。

- — —(2007b)「日常生活世界の記述可能性——ドロシー・スミス『制度のエスノグラフィー』の着眼点——」『文教大学国際学部紀要』28(1)、pp.1-22. 文教学部国際学部。
- — —(2018a)「テキストに媒介された言説とイデオロギー・コード——ドロシー・スミスの institutional ethnography をめぐって」『文教大学国際学部紀要』28(2)、pp.1-20. 文教大学国際学部。
- — —(2018b)「社会を知るもう一つのやり方——ドロシ・スミスに依拠して」『文教大学国際学部紀要』29(1)pp.1-18. 文教大学国際学部。
- — —(2019)「ドロシー・スミス Institutional Ethnography におけるワークおよびワーク・ノレッジ概念の検討」『文教大学国際学部紀要』30(1)、pp.1-16. 文教学部国際学部。